

『花とピストル』

Sweet fruit and a wet pistol

～ヌるりんパクッ！～』

概略

西暦2100年。全てに完璧のアンリ（26）は子供を作り次の人生を歩むため、人間の質、陰部の感度や精度を調べに「子供許可生殖査」に向かう。そこで、合致した官能的な男ソヨギ（32）と巡り会うが、即座に引き離され、不適切者の烙印を押される。「なぜ!」、アンリは幼なじみの女探偵、沙也加（36）に調査を依頼。間違いなのか？罠か？陰謀か？そして、私の花弁を犯した堅くて柔らかい肉棒の持ち主は？」あの一物が欲しい！

【登場人物】

田中アンリ（26）・・・インダストリアル・デザイナー
ソヨギ（32）・・・子供許可審査係官
語り（老ソヨギ65）

沙也加（36）・・・私立探偵（アンリの先輩）
ケント（40）・・・経済エネルギー促進開発会長
タモツ＝男A（33）・・・アンリの同僚
係官Y＝男B（32）・・・子供許可審査係官
係官X・・・子供許可審査係官

他男性係官

他女性係官

サユリ（28）・・・アンリの友達
みか（7）・・・長女
主人（35）・・・サユリの夫

穴開達蔵（あなびらきたつぞう・アンリの祖父）
穴開入蔵（あなびらきにゆうぞう・アンリの父）

【参考】イメージを醸し出すために直接的に表現しています。
ご了承下さい。

○白髪の男（ソヨギ・65）が語り始める。

スーパーイン

『西暦2100年○月○日』

老ソヨギのモノログ（以降、老ソとする）

老ソ 「ある時、大人になれない人間『大人子供』が異常発生。やりたい放題、わがまま、自分勝手に蔓延し、コミュニケーションが破綻するという危機的な状況が地球に訪れた……。それから数年、今は平穏で安定した日々が送れるようになって久しい…」

画面は変わり、

×

×

過去の子供たちの事件

——お受験、いじめ、親殺し、子殺し、自殺、虐待、不登校、ニート、ネットカフェ難民・・・の暗部が次々と流れている。

×

×

「……将来を担う子供達を選別するシステムが確立されたからである。夫婦はもとより、男同志、女同志、シングルであろうが子供を持つにはその能力が備わっているのか、いないのか厳密な審査を受け、合格した者だけが安定した親子の関係を築けるのである。しかし、いつの時代もそうであるように決め事は綻びだそうとしていた。……それは、一人の野性的な女性、アンリから始まった、そして、このシステムはそのアンリの曾祖父、無限達蔵が作ったのである」

モノログが次のシーンに被っていく。

○湖畔のジョギングコース

オレンジ色の斜光が

田中アンリ（26）のシルエットを
際立たせている。

汗ばんだレオタードが
豊かな胸に張り付き、乳頭を尖らせ、
踊っている。
喘ぐ声がプロポーションを引き立てる。
すれ違うランナー達も釘付け。
開脚ストレッチもしなやかに
そして、悩殺。

○アンリの家・ダイニングルーム

朝刊を取り、紙面を見る、
見出しが踊っている
『アンリ（26）地球デザイナーズ
大賞の候補に選出！！』

老ソ 「健全で清潔な地球を維持して行く為
の総合的で具体的な企画発案者に贈られる
優れた賞で、アンリは第1回受賞者の血縁
者にあたり……」

嬉しさ隠しきれずシャワールームへ
飛び込むアンリ。
ウェアのまま栓を捻る。
濡れるウェア、
裸体が透明の表皮に包まれていき、
その下でうごめく。

アンリ「ハーン」

シャワーの口を陰部に当て擦り、
堪らなくなったアンリ。
ウェアを剥ぎ取り、
透き通るパンティーも丸め落とす。
ポロリとこぼれる乳房、
気持ちよく解放される股間。
胸から陰部、陰部からアヌスへと、
シャワーを当て、指をまさぐり一人悶える。

アンリ「あーー」

メインタイトル
『花とピストル
Sweet fruit and a wet pistol
～ヌるりんパクッ！～』

○電車を降り、

街を颯爽と闊歩するアンリは、
ビルに吸い込まれていく。

○オフィス・中

パソコンと睨めっこのアンリ。
マザーマシンの立体透視図（C A D）が、
テキパキと仕上がっていく。
アンリを慕うハーフの
タモツチーフ（33）が来る。

タモツ「おめでとう！」

アンリ「ありがとうございます」

タモツ「将来の心配、無しってわけだ」

アンリ「まあ……」

タモツ「どう？気持ちは」

アンリ「やっぱ、子供もいいなあーって！」

タモツ「えっ？結婚してからでいいんじゃないの。もっとエンジョイしたら」

アンリ「夫婦で不適合だと一生子供持てない
のよ。そんなのいやだ」

タモツ「夫より子供取るんだ？」

アンリ「もちヨ」

タモツ「俺ならバッチリ！両方いけるぜ！」

と言いつつお尻を撫で去っていく。

アンリ「チーフ！」

と叫び、

振り返ったチーフの股間を握りつぶす。

タモツ「あっ、ふーん……」

○シルエットが喘ぐ

バックからのランダム攻撃に喘ぐ女。

男の手が揺れる豊乳を撫で掴む。

男 「判ったな」

女 「アハーン、できない、それは……」

男 「判ったな」

女 「ア、ア、アハーン」

○暗がりの一隅

シルエットのタモツが携帯に報告。

タモツ「そうです。審査に行くと思います」

○受けるシルエットの男

男 「判った」

携帯を切り、続きを楽しむ……。

先程の男女のシルエット

互いの陰部を頬張り合っている。

男 「（ペチャ）しくじるな！」

女「アーン……息が（ングッ）苦、息が」

そして、昇天させられる女。

○スポーツジム・中

豊満な体躯を捻り、引っ張り、

屈折させマシンをこなしていく

Tバックのアンリ。

ハイレグスイムスーツで

静かに水を切るアンリ。

○スポーツジム・外

ラフなジャージスタイルで出て来る、

アンリ。

女の子に声を掛られる。

みか（7）「アンリねね！」

アンリ「みかちゃん！来てたんだ」

みか「そうだよ（にっこり）」

アンリ「泳ぎ好きだもんね。今度遊ぼうね」

みか「ウワァ、ホント？（目がキラキラ）」

元同僚のサユリ（28）がやって来て、

サユリ「アンリ、凄いじゃないの。地球デザ

イナーズ！一躍文化人ね」

アンリ「そんな、よしてよ」

サユリ「今度祝ったげるからね！」

アンリ「あらー、嬉しいわ」

サユリ「そうそう、沙也加姉さんも呼んでサ
ー」

アンリ「懐かしい……」

サユリ「どうしてんかな、あのお姉、会いた
いね。じゃ……ゴメン！ちょっと、遅れて
んの」

みかを引き連れ、待っていた主人と

三人で駆けていく。

みか「（振り返り叫ぶ）アンリねね、約束だよ」
あんり「当ッタリまえよー！」

○点描

戯れる子供たち、スポーツする少年、
校門から下校していく学生たち。
遊歩道をランニングする部活生、
傍らを幼稚園バスが通り過ぎていく。

× ×

老ソ「現在は子供達に危害を加える者たちはいない。自由にのびのび、街を公園をストリートを楽しんでいる。まさに、『子供許可審査』のおかげである」

× ×

子供の活気を見ていたアンリ。
背後から声が飛んでくる、
「アンリ、アンリじゃない？」
振り返る、
アンリ「?! 沙也加、沙也加！」
と飛びつく。
沙也加「何年振りかしら」
アンリ「3年かな？」
沙也加「そうかな。元気そうじゃない」
アンリ「沙也加も。でも、偶然ね！」
沙也加「! そうね……近くに用事があってさ」
アンリ「そうなんだ。さっきまでさ、サユリと会っててさ、沙也加姉と会いたいなーて言ってたところなのよ」
沙也加「地球デザイナーズが幸運をよんでるんじゃないの」
アンリ「ウワー、知ってたの」
沙也加「もちよ。おめでとう」
アンリ「ありがと。偶然よ」
沙也加「そんなことないよ。実力よ。地球を守るって、なんだか、格好いいよね」
アンリ「ほめ過ぎよ。沙也加は？」
沙也加「相変わらず、人のケツ追ってるの」
アンリ「そんな下品な……時間ないの? お茶でもどう」

沙也加「ゴメン！（遮り、名刺を渡す）ないの。また、連絡して。じゃ！」

慌てて去ってく。

アンリ「（呟く）忙しいのも偶然か？」

アンリ、名刺の裏を見る、

『子供作るの考え直したら！』

アンリ「！？沙也加、何で知ってるの？」

沙也加「（振り返り）デザイナーズ大賞獲得。

決まりよね！そうすれば、将来安泰！次は子供。旦那より子供。そうよね、アンリ」

アンリ「（ポカンと口を開け）ええ……」

沙也加「探偵よ！お見通し」

アンリ「負けたわ」

○子供許可審査ホール・表

カラフルで煌びやかな裸体オブジェのポールがホールにインアウトしている。

○ 同・中

夫婦、男性、女性ゲートに分かれ、
各々、欲情ムンムンの混雑ぶり。
超ビキニスタイルの男女係官が
セクシーポーズで案内している。

○ペーパーテスト会場

静寂。

雛壇の大会場で挑む受験者。

大半がここで落選。

スラスラと解いていくアンリ。

○面接会場

【夫婦ブロック】

30代の痩せた夫婦が、
微動だにせず待っている。

係官「（冷徹に）不一致、残念です」
項垂れる夫婦。

×

×

【男性ブロック】

白髪混じりのボディビルダーの
艶やかな小麦色が股間のピンクの

モッコリを際立たせている。

様々なポーズを披露するモッコリ。

係官「ちょっと（手招き）」

係官がモッコリの下部、

睾丸辺りをなぜなぜ、すると……、

モッコリ「あへーー」

とピンクが沁みていく。

係官「帰ってよし！」

後方に着席していたパンチパーマも

落胆してモッコリの後続く。

×

×

【女性ブロック】

お嬢風が係官の質問に答える。

お嬢「赤ちゃんて小さくてかわいいでしょ」

係官「母親としてどう育てたいですか？」

お嬢「えー、そんなの出来てみないとわかん

ない、ねえー（後を向き）先の事なんか分
かんないよねー！」

ヤンキー風の女、後席から跳ね起き、

係官に絡む。

ヤンキー「おっさん！」

係官「失格！」

○健康診断、体力測定会場

女性は透明シルクのブラとスキャンティー、

男性は透明シルクの極小ビキニの出で立ち。

透明シルクはもろ出しより、

はるかに欲情を誘う。

アンリの豊乳にメジャーが廻る。

係官思わず尖った乳頭に吸い付く。

バチン！

頬を張るアンリ。

お尻を突き出すアンリ。

係官「もっと突き出して、股、もう少し開く」

アンリ、より、突き出し、開く。

係官、ルーペ付グラスで陰部を覗き込み、

こそこそ……と計り、刷毛で払う。

アンリ「あー、ちょっと、これ、なにー」

係官「1。2.5。OK。次！」

×

×

ガラス張りの上でアンリ、他一同、
床運動の様に跳ねたり、転がったり、
開脚したり、密着したりしている。

× ×

地下では係官が一同、上を向き、
ポカンと口を開け、
一言も発せず審査している。
マイクが発する。
「合格！」

○汗を拭うアンリ、
最後のテストのプレートを眺め、
笑みが零れる。

× ×

『愛撫セックス感度テスト（夫婦用）』
『生殖合致快感テスト（男性用）』
『生殖合致快感テスト（女性用）』

× ×

老ソ「そして、最後のテスト。
夫婦同志で絡み合う夫婦が受ける
【愛撫セックス感度テスト】、
男同志で精子を提供する男性が受ける
【肉棒強度合致快感テスト】、
女同志で卵子を提供する女性が受ける
【花卉吸引合致快感テスト】、
を合格しなければならない」

○【愛撫セックス感度テスト】ルーム

夫婦が全裸で絡み合っている。
男根を優しく愛撫する女。
ムクムクと盛り上がって、そそり立つ。
血筋も浮き立つ。
亀頭先の唇から液が零れている。
赤貝に鼻を擦り付け、
舌で一枚一枚吸い取る。

× ×

老ソ「【愛撫セックス感度テスト】は係官
が全面マジックミラーから性行為を観察。
互いに絶頂に向かえばオーケー。一方が
一方を追いつめない限り合格。後は妊娠

して産むだけだ」

×

×

男と女、グッポン、グッポン、クチュ、クチュ、入れポン、出しポンが変異体位で繰り返される。

「ダメー、ハヤーーク！」

×

×

外ではいつの間にか生殖器を合体しあった男女の係官が腰を振っている。

×

×

係官「アウー、ゴウカク！」

○【花卉吸引合致快感テスト】ルーム

老ソ「【花卉吸引合致快感テスト】は十四名の男性係官が7ブロックに仕切られたスペースに入っている女性を審査する。陰部挿入7名、フェラチオ7名同時に行う。陰部に当たる部分、顔面部に当たる部分だけがヌルリンと飛び出ている。もちろん、係官、受診者は共にマスク着用」

×

×

各スペース、中央に四つん這いの女性、前後に男性が立ち、作業を戯れている。

×

×

女性は陰部、眼部、口部、乳房部だけがさらけ出されているゴールドの半透明の皮膜に包まれている。

同様にシルバーに包まれている

男性係官はナマの陰部だけが放り出されている。

×

×

老ソ「その姿は妙に生々しく卑猥である。

蛇か亀の頭のようなモノがせっせ、せっせと後から7回、前から7回、女性を弄び審査していく。

そそり立った艶やかな笠の括れたペニスを、突き出された愛液がぐちゅぐちゅの陰部にズブズブズブと無表情に喰いこませていく」

絶叫がこだまする。

「キャァー！アレー！」

「もうー、ダメー、イクー！」

ーーその点描。

×

×

老ソ「一人の係官の所要時間は30秒、後から7挿入。前から7喰わえ。合計420秒、7分の花弁吸引合致快感テストである。

グッポン、グッポン、ぐっちゃり、ねっとり、ぐちゅぐちゅ、ぐんにやりと女性達は突き上げと割り込みを誘う、肉棒の強靱さとおまけに笠の引っかけりに失神寸前。

「あっ、もう、だめーん」

ーーその点描。

ビー！

サイレンが鳴る。

「30秒ごとの進めの合図」

×

×

老ソ「マスクから覗いた女の光る眼球が、べそかきの瞳のようなその穴から何かが吹き出しそうな張りとお艶を持った亀頭の蠢きを捉えた。かと思えば、赤くて柔らかい唇にねじ込まれ、そのあたたかな弾力感を味わわされ、つい、奥までしゃぶり付いてしまう」

「ガブッ！ジュルージュルー！」

点描ー女の眼と唇と肉棒。

×

×

後ろからもグッポンぐっちゃり。

老ソ「係官は女性の締め付け具合や吸い込み感覚、まとわり感、粘つき感、包容、凝縮具合、転がし感を診断する。最高絶頂を求めて、二つの口にじっくり肉棒を挿入していく。そして、ピンクライトが輝けば合格。前後2名の男性係官から同時に了承を得、難関突破したことになる。合格だ。好きな男性係官の精子と肉棒のおもてなしを求めてフリーのセックスタイムへ進む事になる。ただ、男と女、予期せぬ事も起こりうる。快楽に溺れる「快楽不倫」だ。本末転倒、

見つかり次第、即刻、射殺！家族も道連れ！
その事だけを肝に銘じ、優秀な係官の精子
の挿入と一夜限りの官能と快楽に仰け反り
打ってくれ」

マスクをした男女が互いの陰部を遊び
ヌルヌルの裸体を絡み合わせている。

○7ブロックの1ブロック

アンリ「(声が弾む) アー、もう、イクー！」

アンリのピンク色に花開いた陰部が肉棒
をグッチョリと包み込み花卉の脇から滴
がしたたり落ちていく。

前ではさおの側面に舌を絡ませたり、
裏を突ついたり、袋を吸い込んで、
玉を転がしたり、先っぽ吸い付いたり
ドロドロである。

こともあろうに、なんとその男性係官C
が表情を強ばらせているではないか。

老ソ「本能丸出し、快楽だけの低脳動物に見
えるが、彼らは全て教養、知性、生活、経
済力が行き届いている合格者なのだ」

アンリの半開きの唇に次々と生暖かく
毒々しい海綿体が食い込まされていく。
腰をくねらせ、乳頭を尖らせ、
悶え苦しむアンリ。

アンリ「(呟く) そう、とっても気持ちいい。

あー、良い遺伝子が欲しい。あっはーん。

ダメ、ダメ、ダメ。まだ。かわいい子供…」

グッポン、ねっちょり、グイイーン。

アンリ「アッ！そうそう、コレー袋の当たり、
最高。そう、これよー！」

男性係官ソヨギ（32）も思わず呟く。

ソヨギ「おー！これだ！」

汗ばんでいる全身の筋肉が肉棒に集中て
いる。

ハードアクションがより高まっていく。

○ある一室

女の影が係官X、Yにモノ言う。

係官X、Yは静かに頷き、その場を去る。

○元の場所

アンリ「もうーだめ。あー我慢。早く見たい、
しゃぶりたい。そして、ゲット！」

ソヨギ「（呟く）決まりだ！」

握られてるピンクライトスイッチの
カバーを外し、指を当てる。

その時、

アンリ「?!」

ソヨギ「?!」

スッポーンと女性陰部から
男性陰部が抜きださされる。
愛液どろどろの二つの性器。

アンリ「なぜ！」

ソヨギ「何だ? どうした！」

別の男性係官Xが囁く、

係官X「あいつはダメだ。間違いだ」

二人の警備隊が抵抗するアンリの口を塞
ぎ、ウムを言わず迅速に連れ出す。

一瞬、

互いにマスク下の眼光を見つめ合う、
二人。

後を追う、ソヨギ。

係官X「よせ! ソヨギ」

○ある一室

係官Yが直立不動となったアンリの
マスクを剥がし、右の耳元にレーザー
光線で# 0 0 7と刻印する。

× ×

陰で覗くソヨギ。

微かに窺えるアンリの横顔と

耳元の# 0 0 7を凝視。

一室にアナウンスが響く、

「ナンバーリングされた。ペニス挿入禁
止。これは法律による。あなたは異質物。
子孫残してならず。ペニス挿入禁止。違反
者は即刻射殺」

叫ぶ、

アンリ「やめてよ。そんなのー。何かの間違

いよー！？？」

おかしい？声になっていない。口がパク
パク動いているだけー。

絶望、アンリ。

涙が一滴、頬に落ちる。

× ×

陰で見ていたソヨギ、踏み出す。

係官X「待て、やめるんだ」

羽交い締めにする係官X。

× ×

肩を落としたアンリが反対側のドアから
出ていく。

○アンリの顔（イメージ）

「最高。そう、これよー！」

○ソヨギの顔（イメージ）

「おー！これだ！決まりだ！」

○ある裏路地

耳元を手で被い、

人目につかぬ様に項垂れ歩むアンリ、
名刺を取り出す。

【小林沙也加】

○アンリの家・表～中

沙也加、インターホン押すが反応無し。

沙也加「仕方ないか」

様子を窺い浸入。慣れたモンだ。

居間、キッチン、寝室と窺っていく。

沙也加「（呟く）行ったんだ……」

○山間の何も無い空き地に止まるタクシー

降りるアンリ、

仰ぎ見るとロジ風の家が垣間見える。

そこに向かう山道を登っていく。

アンリ「フーフー」

息を切らし、ノックするー。

ー反応無し、

アンリ「アーアー、やっぱり」

○アンリの家・中

沙也加の眼が止まる。

『笑顔一杯のアンリと沙也加とサユリ』
センターのダークスーツの沙也加が、
カジュアルスタイルの2人の肩を抱え
てる。

あれから、10年は経つであろうか。

沙也加「……」

携帯が鳴る。

沙也加「……（発信者を確認して）」

出る。

沙也加「アンリ？……来たんだ。留守してご
めんね……どうしたの、アンリ……ねえ…
…泣いてるの？」

アンリ「……沙也加ネエ……」

○沙也加の家・前

アンリ「……ナンバーリングされっちゃった。
なぜ？」

○真っ赤なアルファロメオのステアリングを
握る女性私立探偵、沙也加が頭を
かかえて……。

沙也加「やっぱ、行ったんだ……」

× ×

アンリ「ねえ、どうして、なぜ？」

沙也加「……怪しい奴が審査場に潜入してい
るらしいのよ」

アンリ「なんで言ってくれなかったのよ」

沙也加「ゴメン、これは極秘なの、私も立場
上、絶対にダメなの。判って、アンリ」

アンリ「判ってる。でも、そんなこと言った
って。セックスだめ。子供だめなんだよ！
（涙声へと）これからずーっと……」

沙也加「判ったわ。アンリ、よく聞いて。さ
っきも言ったように怪しい奴の仕業なの。
だからそいつを挙げれば、アンリの潔白は
証明できるわ。時間の問題よ」

アンリ「ありがとう、お願い……」

沙也加「ほかに何か出来る事は？」

アンリ「もう一つ……あるの」

沙也加「なに？」
アンリ「最後の男性係官が誰か探して……」
沙也加「というと？」
アンリ「合致快感テストで合致しかけたの！」
沙也加「どうして判るの？」
アンリ「第6感、野生の感覚」
沙也加「相手もそう？」
アンリ「たぶん、そうだと思う」
沙也加「ほんとに？」
アンリ「だから合致なの。最高だった。この世のものとは思えない」
沙也加「ヒューー。それは多分簡単に見つかるわ。実地体験すれば。私のアソコに彼のモノを挿入すれば、一発よ。それでもいいの？」
アンリ「一回だけよ。それと、間違っても合致しないでよ」
沙也加「アンリ！神のみぞ知るよ！」
アンリ「でも、彼は私のモノなの。彼の子供が欲しい」
沙也加「オッケー。そこで、じっと待ってて。今、すぐ戻るからさ」

○山間の空き地にアルファロメオが着く。

茶袋を抱え、山道を登る沙也加。

ロッジ風の家が見えてくる。

待っていたアンリが駆けて来て、

沙也加に泣きつく。

沙也加「分かったよアンリ。今日はゆっくり休んでいきなよ。明日送ってあげるからさ」

アンリ「（ただ頷くだけ）」

沙也加「どうせ、何にも食べてないんでしょ。

アンリの好きなラザニア作ってあげる。そんなでいいでしょ」

アンリ「（少し笑む）」

○フリーセックスタイムの部屋

ソヨギと女性が絡み合っている。

怪しい光りが瞬いている。

互いの陰部のしゃぶり合い。

肉棒が胸から腹、下腹、そして、
パッキリ大きく開いた陰部へ。
そこへ、滑り込むペニス。
ソヨギが動く。しかし、
女性が無然と、

女性「ぜんぜん感じない。あの一それじゃ
ダメなんですけど」

ソヨギ、モノを抜いてみる。

女性「しょぼくれたのは、要らない」

ソヨギ「ゴメン！」

係官としては最低の失敗だ。

○沙也加の家・ベッドルーム

眠りに就いているアンリ。

沙也加は月光に青白く照らされている

ナイフを空虚に見つめている。

そして、アンリの寝顔も――。

○ 同・次の日

朝日が眩しい。

沙也加「アンリ。起きなさい」

布団を剥がす。

アンリ「キャー、もう、もっと寝かせて！」

沙也加「だめ、アンリのため、私は仕事なの。

早く、トースト食べて、コーヒー飲んで」

アンリ「判ったわよ。でも、絶対、取らない
でよ」

沙也加「誰のこと？」

アンリ「もう（と枕を投げる）」

○アンリの家・表～通り

アンリを見送り、

ロメオに乗り込む沙也加

沙也加「！？」

後部座席に潜んでいた係官Xが

喉元にナイフを突き付け、

係官X「なぜ、殺らなかった」

沙也加「慌てないの」

係官X「なんなら、今から俺が殺ろうか」

沙也加「お楽しみはこれからよ」

係官X「いい男らしいな？」

沙也加「！？」

係官X「次はないぜ」

出ていく。

○子供許可審査ホール・表

足取り軽くやって来る沙也加。

× ×

問題なくペーパーテスト、面接、
健康診断、体力測定を通過し、
「花卉吸引合致快感テスト」へ、
突進——。

× ×

ルンルンで来る沙也加。

沙也加「（呟く）楽しみ調査、一挙兩得、ア
ンリもそうなら、私も失神エクスタシー、
ゴックン」

○7ブロックの1ブロック

沙也加の花弁は早く早くと火照り、開い
てる。そこへ、ソヨギが肉棒を挿入、
待ちかねていたように生暖かい筋肉が
吸い込まれていく。ズボーン！

沙也加「アーアーアヘアヘソコー、イクー」
我を仕事を忘れて悶絶絶頂！

ソヨギ「！？似てる」

擦っているうちに一物が肉道の中で更に
みるみる太く長く堅くなっていく。

沙也加「？？あは——ん」

ソヨギ「違う？が、でも、似てる」

沙也加「あ——もっと——。あっ！これだ
これ！そう、これだ、私も欲しい！」

ソヨギ「でも、少し違う」

ソヨギがスピーディに腰を振り始める。

沙也加「はーあはーだめー。あー……」

沙也加の手がソヨギの握るピンクライト
スイッチの手を掴む。

ソヨギ「！？」

その時、ブザーが鳴り、

ソヨギは次に進む。
沙也加「……きつ・と・あれ・よ……」
——ワイプ——
沙也加の目の前に巨大で美味しそうで
括れの良い亀頭が現れる。
沙也加「……ング！？これは！！」
はち切れそうな海綿体の膨張が
沙也加の唇にねじ込まれる。
沙也加「モゴモゴチューチュー」
ソヨギ「あー」
沙也加「モゴモゴ、# 0 0 7…モゴ…知って
る？モゴ……」
ソヨギ「0 0 7！？」
ソヨギの動きがピタッと止まり、
ゆっくりと男根が抜かれていく。
びっしょりだ。
沙也加「あー抜かないで。もう少し食べさ
せてよ……」
ソヨギ「知ってるのか？」
沙也加「（頷く）」
ソヨギ「どこに居る？」
沙也加「1 9時スタバで待ってる」
ソヨギ「1 9時、スタバ」
沙也加「（頷き）早く、突き出して！」
ソヨギ、肉棒を突き出す、
喰らいつく沙也加。
再びブザー！
沙也加「チーッ！こんど、続きをお願いね」
ソヨギは次に進んで行く。
ニンマリの
沙也加「あへー！」
次なる男根が後ろの陰部に、
前からは笠の大きい亀頭が唇めがけて
突っ込んでくる。

○アンリの家・リビングルーム
携帯を神妙に聞いているアンリ
係官Xの声「1 9時、スタバを見てな！」
アンリ「だれ？あんた」
係官X「隠れて見るんだぜ（切れる）」

アンリ「……」

○スタバ（夕暮れ）

青い世界が灯り始めた窓外を眺めている
ソヨギ、ビールを口にする。

声 「沙也加です」

ソヨギ「（振り返り）…どうぞ、ソヨギです」

沙也加「うふ……」

ソヨギ「すぐ、判りましたね？」

沙也加「当たり前でしょ！」

ソヨギ「何します？」

沙也加「同じもの」

ソヨギ、注文する。

ソヨギ「失礼だが、ストレートに質問する」

沙也加「うふ、いいわよ」

ソヨギ「彼女はどこに？」

沙也加「名前はアンリ」

ソヨギ「アンリ」

沙也加「ナンバーリングのショックで連絡が
有ったの」

ソヨギ「君は？」

沙也加「姉貴みたいなもん。そして私立探偵！」

ソヨギ「（頷き）で、どこに？」

沙也加「そんなに、彼女を……」

ソヨギ「（頷き）最高だった」

沙也加「（頷き返す）」

ソヨギ「彼女は？」

沙也加「あたしはどうだった？」

ソヨギ「かなりいい」

沙也加「でも、2 番目」

ソヨギ「イヤー、相性だ」

沙也加「わたしは、最高だった。今でも疼き
を感じるわ」

ソヨギ「ありがとう。でも、僕は……」

沙也加「アンリに似ているあたしの花卉があ
なたを捜し当てたのよ。判っている？」

ソヨギ「ああ、わかった」

沙也加「後で教えるわ。ウフー早く、入れたい」
沙也加はソヨギの手を引く。

○スタバ・前

通りの向かえに駆けてきたアンリ、
電光時計を見て、【19.15】

アンリ「は一、マズったかな」
ネオンと窓灯りが
夜の始まりを告げている。
一郭に沙也加の姿を捉える。

アンリ「沙也加……」
駆けて行くアンリ。
行く手を遮る、男の後姿。

係官X「まだだ、見てろ！」
係官Xの背中越しに、
妖艷な笑みを湛える沙也加が
ソヨギの腕を弄んでいる。

アンリ「沙也加……まさか」
行こうとするアンリ。
の腕を掴み、

係官X「（ニィ）まだだ」
二人の姿が角に消える。
アンリの腕を離し、

係官X「おもしろくなってきた」
駆けていくアンリ。

○歓楽ビル街

雑踏の中一、
遠方に二人を見るアンリ。
沙也加、ソヨギの腰に手を回し、
頬にキス。再び角を曲がる。
追うアンリ、角を窺った瞬間、
二人はビルの地下に沈んでいく。

× ×

ラブラブルームの灯りが飛び跳ねている。
並ぶドアの一室に入っていく二人。

× ×

ー、前に佇むアンリ。
ホワイトパール仕様が眩い
オートマチックドアに

【タイムリミット2時間】
の液晶電磁プレート。
腕時計に目を落とし、反対側の壁を叩く、

アンリ「チェッツ！」

○開かずのラブホテル・一室

深海に潜り込んだ様な不思議な空間。

ソヨギ「誰が尾けてきた？」

沙也加「ふーん、誰と思う」

ソヨギ「(遮り) アンリか！」

沙也加「そうよ」

ソヨギ「なぜ、言ってくれない」

沙也加、自分とソヨギの衣服を剥ぎ取り、

沙也加「私と出来なくなっちゃうじゃないの！」

自分のブラを取り、立ちかけている乳頭に
ソヨギの口を押しつけ、隠しきれない陰部
の上に小さく湿り付いたパンティーに彼の
手を引き寄せる。

そして、屈み込んでいき、

ソヨギの唇を求め、吸い合い、絡ませ合い、

更に下に滑り、胸、臍、下腹を這い、

ソヨギのもっこりしたシルクの超ビキニに
舌を這い回し、

沙也加「アンリはケヤキ通り 6 9 の 6……あー
ーん」

ソヨギ「(呟き) ケヤキ通り 6 9 の 6」

蠢きだしたモッコリをビキニ上から頬張る。

ソヨギの体臭が広がり沙也加は悶える。

入りきらない片方の睾丸を手で柔らかく押
しつける。が、もう不可能だ。

沙也加の中でムクムク盛り上がっており、
耐えきれない彼女の口から溢れた成長中の
一物は熱い。

沙也加の目の前にはビキニから

溢れ飛び出た艶やかな一物。。

沙也加「あーーーーー」

思わず竿の横をかぶり、睾丸を吸い取り、
亀頭にむしゃぶりつく。

液が滴る口開いた股の一輪の花弁に

ソヨギは沈み込む。

二人の営みは激しく燃え、

冷えたフロアで、

オイル塗れの肉体をシャワールームで、

柔らかいベッドルームで乱れ舞う。
沙也加「気持ちいい。イイー。私の方がいいんじゃないの。ソヨギ！」
黙っているソヨギ。
沙也加「ねー？私の方がきっと、幸せになれるわ」
ソヨギ「約束が違う」
沙也加「あなたの事を思って、言ってるの」
アヌスからワギナへと舌を転がしていた、
ソヨギ「どういうことだ」
沙也加「あーあへ、あーあ、最高！止めないで。あへあへへー、グチュー」
張りつめた男根を再び喰わえるが、
頬張りきれない。
それをグイッと押し込むソヨギ。
もがく沙也加、窒息しそう、
手足をバタバタさせている。
ソヨギ「早く教えろ！」
頷く沙也加。
抜ける男根。
グチュグチュである。
沙也加「はあはあはあ、わかったよアンリの姉貴みたいだと言ったわよね……」

○アンリ、ネオン街を彷徨っている。

○開かずのラブホテル・一室

一戦を終えた二人――。

沙也加「地球デザイナーズ大賞ってご存じ？」

ソヨギ「ああ」

沙也加「アンリは今年の候補。最有力、多分間違いなく選ばれるわ」

ソヨギ「素晴らしい」

沙也加「そう、最高の女性になるわ」

ソヨギ「（口笛）ヒューー！」

沙也加「第1回目の受賞者は、もちろん知っているわね」

ソヨギ「うちの子供許可制度を発案、創業した穴開達蔵（あなびらきたつぞう）会長だ」

沙也加「アンリの曾祖父なの」

ソヨギ「へー、なんてこった」
沙也加「その制度を作った穴開会長も制度も
気に入らない奴がいるの」
ソヨギ「反乱者？」
沙也加「経済エネルギー促進開発会長のケン
ト」
ソヨギ「ナンバーリングされた？」
沙也加「そう」
ソヨギ「嫌な野郎だ。権力を使ってナンバー
リングを自由に操ろうとした卑劣な奴だ」
沙也加「それが発端。まさか自分がそうなる
とは露とも思わない。子孫が残せない。築
いた会社や富、名声も断たられる。そら、
おもしろくない。って事で復讐、道連れっ
てこと。穴開家を絶つ！」
ソヨギ「……」
沙也加「アンリの父親、穴開入蔵（にゆうぞ
う）がケントの催すパーティーに招待され、
そのホテルに泊まったときに亡くなったの」
ソヨギ「死んだ？」
沙也加「アンリには心臓発作で事になってる
けど多分、見せかけの毒殺」
ソヨギ「毒殺っていうのは？」
沙也加「私の見解……」
ソヨギ「へー、冗談か？」
沙也加「（キッパリ）ノー。念には念を入れ
たケントの仕業。彼は裏社会の黒幕なの」
ソヨギ「なぜ、判る」
沙也加「当時、アンリの父、穴開入蔵の部下
だったの、私は」
ソヨギ「ヒューー、凄んだな君も」
沙也加「そこで、よく耳にしたの。経済エネ
ルギー促進開発の者を怒らせたら命がない
って。そんな時にパーティーの誘い。断れ
ばいいのに、行って会ってみなきゃ判らな
いって……それきり……」
ソヨギ「……」
沙也加「悔しいから、一人でケントを調べた
の」
ソヨギ「怖くなかったか？」

沙也加「夢中で」
ソヨギ「探偵の素質、有りってことだ」
沙也加「いろんな悪事に手を出していたわ。
人間を人とは思っていない。毒蛇よ。一度
噛みついたら離れない……我に返って、怖
くなってきてさ、調べるの止めたの」
ソヨギ「恐れ入るね。で、その事はアンリに
は？」
沙也加「言っていない！アンリには父しか居な
かったんだもん。ショックが大きすぎるわ。
彼女、しばらくは不安神経症になって家か
ら出られず、私も一度刺されそうになっ
たわ」
ソヨギ「（溜息）」
沙也加「彼女の為に、いつか、時期を見て言
うかもしれないし。言わないかもしれない」
ソヨギ「そして。穴開家の一人の血筋、アン
リをナンバーリングにて絶つ。ケントが動い
た。地球上から消える」
ソヨギ「なんて野郎だ。悪党め！」
沙也加「（目が光る）キラッ！」
ルームアナウンスが響く、
『5分後にドアが開きます』
ソヨギ「待てよ！ケントの事だから君のこと
も知ってるんじゃないか？」
沙也加「（頷く）ええ、多分。泳がされてる
かもしれない。獲物を殺るまで。そして、あ
なたも」
ソヨギ「えー、おい、よせやい。冗談だろ」
沙也加「いいえ、奴のことだから私たちは必ず
マークされてるわ」
ソヨギ「！どうして、話したんだ」
沙也加「教えろと言ったじゃない」
ソヨギ「居場所を聞いただけだろ！」
沙也加「ナンバーリングのことも」
ソヨギ「ま、そうだけど」
沙也加「仕方ないでしょ。話の流れでこうなっ
ちゃったんだもの」
ソヨギ「命掛けてんだぜ！」
沙也加「あたしも！」

ソヨギ「で、手だてはあるのか？」
沙也加「だから、あたしの陰部があなたをキャッチ！」
ソヨギ「キャッチ？何、いつてんだよ？」
沙也加「喰わえて、離さないの。つまり、私のアソコがあなたを選んだわけ。頼むわよ」
ソヨギ「何を」
沙也加「ケント抹殺！」
ソヨギ「止せやい、何いつてんだ！」
沙也加「彼女を助けられるのは、あなたしかいないのよ！」
ソヨギ「くそーっ！！」
沙也加「大丈夫、私の褳が疼いたの、あなたが知らない凄い力が潜んではずよ……」
× ×
ブザーが鳴り、
『ドアが開きます。注意して下さい。
ドアが開きます』
シャアーーーー！
アンリが勢いよく飛び込んで来る。
アンリ「取らないって言ったわよね！」
瞬間、沙也加はバッグからナイフを取り出し身構える。
アンリ「（悲壮な顔）沙也加さん」
沙也加、凍えたように躊躇する。
沙也加「（呟く）出来ない」
ソヨギ「？」
アンリ「？」
沙也加のナイフがピクリと動く。
ソヨギ「！」
ソヨギ、俊敏な動作でナイフをはたき落とす。
飛んでいくナイフ。
よろける沙也加。
立ち竦んでいる、アンリ。
沙也加「（ソヨギを睨んでいる）」
ソヨギ「（呟く）君は……（見開いている眼）」
即座に身を立て直しナイフを拾い上げ、ソヨギに斬り付けようと挑む沙也加。
揉み合い、ソヨギ、ナイフを取り上げる。

沙也加の腕から一筋の血が流れる。
ソヨギ「だいじょうぶか？」
沙也加「（見つめ）ええ！」
ソヨギを押し退け逃げる。
沙也加「アンリごめん。最高に燃えちゃった！」
ソヨギ「君は……」
床にへたり込むアンリ。
沙也加「さよなら」
去っていく。
彼女の後ろ姿を虚ろに捉えるアンリ、
「（囁く）なんて事なの！」
ソヨギ「———」

○夜の街

角を曲がり一息吐く、
沙也加「（一雫の涙が流れる）」
正面を見据えた瞬間、
沙也加「！（驚愕）」
銃声が一発響く。
ドキューーン！
続いて一発。
ドキューーン！

○開かずのラブホテル・一室

アンリ「！？」
ソヨギ「！？」
駆ける——。

○夜の街

立ち止まる、そして、凍てつく。
アンリ「沙也加……？」
ソヨギ、周囲を伺い、倒れている男の顔を伺う。眉間に一発！係官Xだ。
ソヨギ「こいつもか……」
すでに沙也加は居ない。
彼女の血が道を横切っている。
ソヨギ「行こう」
アンリ「沙也加は？……」
ソヨギ「（首を振り）……」

○ある裏のストリート

沙也加、血の滴る、二の腕を押さえ、
通り過ぎていく。

沙也加「（呟く）ソヨギさん。あと、よろしくね」

○元の場所

アンリ「今までにこんな事なかったわ」

ソヨギに突っかった瞬間、
ドキューーン！間一髪。
ソヨギ、アンリを庇い、脱出。

○沙也加の真っ赤なロメオが駆けていく。

ハイウェイを突っ走るロメオ。

× ×

暗闇に浮かぶ男のシルエットが携帯を
遊び、月夜を楽しんでいる。

男「……」

× ×

夜空を疾走するロメオ。
苦痛で歪む顔の

沙也加「あんたを……必ず、殺してやる！」

× ×

男、静かに携帯を閉じる。

× ×

山間の木々に囲まれた空き地に
滑り込んだロメオ。

眼下に広がる明滅する街を眺め、

沙也加「……」

山道に行く……、
土が削れ、枝が折れている。

沙也加「?!」

タイヤの轍が残っている……。

沙也加、用心して足を運ぶが、
背後から声が、

声 「ごくろうさん！」

後頭部に銃口が押し付けられる。

○アンリの家・ベッドルーム

燃え上がる二人。

乳房、肉棒、アヌス、花卉が全て
奮い立っている。

アンリを抱きしめた、

ソヨギ「彼女も苦しんでいた……」

アンリ「……」

ソヨギ「生きて、ケントから逃れられないと」

アンリ「私を殺すしか……」

ソヨギ「そうだ。しかし、ケントは判っていた。君を殺せないと」

アンリ「（項垂れ）ひどい……でも、なぜ、
ケントなんかに……」

ソヨギ「快楽に溺れたんだろう。男と女。弱い
ところもある」

アンリ「皮肉ね」

ソヨギ「云いにくいが君の父さんは……」

アンリ「ケントが殺った……」

ソヨギ「知ってたのか」

アンリ「ホントだったのね……」

ソヨギ「！？」

アンリ「やっぱ……そうだったんだ！」

ソヨギ「！……」

アンリ「決めた！とっ捕まえてやる」

ソヨギ「おいおい、変な事言っちゃったかな」

アンリ「父も殺し、私も沙也加も殺そうとし
てる奴なんか許せない！」

ソヨギ「（頷き）そうだな」

アンリを抱き寄せる。が、

アンリ「（気付き）？写真の位置が変わって
る？」

ソヨギ「（写真を手に取る）」

アンリ、沙也加、サユリが笑っている

ソヨギ「ここに居るとまずいな」

ソヨギ「銃あるか？」

○沙也加の家・ベッドルーム

男A Bが沙也加を四つん這いにさせ、
後方に居るケント（マスク着用）に、
捧げるよう花卉を突き上げさせている。

それを弄ぶケント。

沙也加「あーん、やめて、早く……」

○街中（夜）

アンリとソヨギ、ホテルに入っていく。
二人のシルエットが再び交じり合う。

○沙也加の家・ベッドルーム

四つん這いになっている、
沙也加「あー早く、弄ばないで！入れて！」
ケントが濡れた肉棒を花卉に一気に
突っ込む。

沙也加「あーん！」

ケント、マシンガン如く腰を振る。
沙也加「あうあうあう、久しぶり。やっぱ、
いい。あうあうあう！？抜かないで」
ケント「君はミスった！おしまいだ！」

抜く、

沙也加「お願い！」

ケント、ゆっくりと前に立ちはだかる。
沙也加、思わず艶やかな亀頭を
頬ばろうとした瞬間、
髪を掴み、顔を向けさせ、
マスクを取る、
ケント「（血走っている眼）」
沙也加「（驚愕！）」
パンチが顔面に炸裂！
沙也加の悲鳴が轟く！

○街のホテル

アンリ「ウァーーーーー！」
瞳が開きっ放し。
ソヨギ「（恍惚）」
滴る汗と共に果てる。

○カフェ（朝）

朝食を摂るアンリとソヨギ。
アンリの携帯が鳴る、
[発信元、タモツ]
アンリ「おはようございます。どうしたんで
すか？」
声 「残念だ。生きてたのか？」

血の気が引いていくー、アンリ。
ソヨギ「!？」
アンリ「チ、チーフですか？」
声 「彼氏と替わってくれ」
アンリ「チーフ、ね、どうしたんですか？チーフ」
声 「……替わってくれ」
アンリ、ソヨギに差し出す、
声 「沙也加が自室で喘いでいる。時間の問題だ。あと、数時間の寿命かな？君次第だ」
ソヨギ「!……」
声 「判ったか。悪いがアンリに替わってくれないか」
アンリ、出る。
アンリ「もしもし……」
声 「じゃ、デザイナーズ、おめでとう。糞くらえだ！（切る）プーー」
アンリ「（落胆）先輩が……手下……」
ソヨギ「で、筒抜け」
アンリ「信じられない」

○突っ走るアンリとソヨギのポルシェ。

山間と入っていく、
窓外を静かに眺めているアンリ、
振り向き、
アンリ「確かこの辺り……」
緩やかに進むポルシェ。
× ×
木々に囲まれた隙間に
真っ赤なロメオが見え隠れする。
その横に滑り込むポルシェ。
× ×
家へ続く足跡と轍が付いた道を
様子を窺いながら登る二人。
沙也加の家、ロッジ風の母家のドア、
カーテンは閉じられたまま。
その奥、後方には納戸が見え、
隅にバイクらしい一部が覗いている。
× ×
草陰から窺っているソヨギとアンリ。

○沙也加の家・ベッドルーム

顔は腫れ上がり身体中傷だらけの
沙也加はボロ布のように転がっている。
傍らでケントが禪を組んでいる。
窓横には男Aが無表情に立っており、
ベッドルームに続く、

× ×

リビングルームでは男Bが窓端から
外を窺っている。

× ×

瞑想のケントが口を開く、
「俺を怒らせちゃいけない」

○沙也加の家・リビングルーム

男B、窓際に屈み込み凭れかかり、
そして、大欠伸。

○ 同・表

逃さないソヨギ。
一気に納戸に疾走する二人。

○ 同・リビングルーム

男B、気になりドアを開け外を窺う。

× ×

瞬間、納戸の影に消える二人。

× ×

男B、不審ながらドアを閉める。

○納戸・裏

3台のバイクが並んでいる。

ソヨギ「3人か、な？」

アンリ「で、どうするの？」

ソヨギ「（銃を翳し）これでタンクをぶっ放
す」

アンリ「ヒューー、それで？」

ソヨギ「その後、君は正面から堂々と出てい
く。誘き寄せてくれ。危険だけど」

アンリ「（覚悟）判ったわ」

ソヨギ「その隙に沙也加を助けケントを殺る」

アンリ「大丈夫？（不安そう）」

ソヨギ「必ず助ける！」

○沙也加の家・ベッドルーム

瞑想のケント。

傍らの血染めのシーツがもぞもぞと動く。

× ×

窓隅から窺っている

ソヨギ「くそっ！」

× ×

ケント「！？」

男Aに目配せ。

男A、窓を開け外を伺う。

男A「？」

× ×

ソヨギ、身を翻し物陰に飛び込み、

バイクに一発撃ち込む。

爆音が轟き、

3台のバイクが木っ端みじんに吹っ飛ぶ。

○同・中

慌てる男A。

眼をゆくりと開け、静かに立つケント。

外に飛び出ていく男B。

○沙也加の家・表

煙がもうもうと立ちこめ何も見えない。

が、

暫くすると――アンリが現われる。

男B「（叫ぶ）アンリがいます」

○同・中

ケント、眼をギラつかせる。

ケント「アンリ自らのお出ましか」

シーツの中で開眼する沙也加。

ケント「（男Aに）ソヨギが居るはずだ。こ

いつを縛って見張ってろ」

男A「はい」

様子を窺っているソヨギ。

○ 同・表

炎に包まれた納戸と煙のなかで、

アンリが動き出す。

男Bがニヤついている。

アンリが男の顔を認識すると、

アンリ「（立ち止まる）タモツ……」

タモツ「（ギロリと睨み）こんな事になると
は……」

アンリ「……思わなかった」

ケントが現れる。

一歩、後退るアンリ。

ケント「待ってたぜ！アンリお嬢さま」

アンリ「キッ！（と強がる）」

ケント「はじめまして、ケントだ」

アンリ「（睨み付けている）」

ケント「いい顔だ。一回はヤリてーな、アン
りお嬢」

アンリ「（睨み付けるだけで精一杯）」

ケント「いろんな事知ってる顔してるな？」

アンリ「……」

ケント「（怒鳴る）どうなんだ！」

アンリ「ええ、ええ、もちろんよ」

ケント「（大きく頷く）声もかわいい……ソ
ヨギはどこだ」

アンリ「どっかに居るでしょ？」

ケント「（高笑い）いい答えだ。まあいい、
たかが色狂いの係官だ」

アンリ「沙也加を返して」

ケント「お父さん、そっくりだ」

アンリ「（顔が歪む）」

ケント「またまた、いい顔だ」

ケント、じっくりと歩み寄っていく。

ケント「心配するな。殺しはしない。まず
は、味見だ。良ければ沙也加もおめえも
返してやる」

ゆっくり後ずさる……アンリ。

○ 同・ベッドルーム

男Aを倒し、沙也加を助ける、

ソヨギ「（男Aは係官Y）お前もか！」

沙也加「（息絶え絶え）ありがとう」

○ 同・外

アンリ、ケントに追い詰められ
目と鼻の先、
ケントの嫌らしい爬虫類のような舌が
アンリの鼻を一舐めする。

アンリ「いやーん！」

咄嗟にビンタを叩き逃げる。
ケント、じつくりと叩かれた頬を擦る。
タモツ、難なくアンリを捕まえる。

タモツ「エヘヘ」

アンリ「気易く触らないで！」

タモツ「エヘヘヘ」

○ 同・中

ソヨギ「（察知し）！」

沙也加を促し、飛び出していく。

○ 同・外

ーー、一瞬にして動きが止まる。
タモツ、アンリを羽交い締めにして、
銃をソヨギに向けている。
ソヨギは銃をタモツに向けてる。
その背後に沙也加が寄り添っている。
そこへ、鼻歌混じりでケントが銃を
ゆっくり取り出し、ソヨギに向ける。

ケント「はじめまして、ソヨギさんよ。助
かったよ。仕事を楽にしてくれちゃっ
たさ。俺だけが自由って。嬉しい限りさ」

ソヨギに銃を向けたまま歩き回る。

ケント「君たち三人が消えれば、俺もやっ
との事で一息つける。そう、そうだよな
……（高笑い）ワハハハ……」

ソヨギ「……」

ケント「ワハハハ……俺が勝つ！ハハハ、
でも、まだだ。少し待っててくれ」

○山道をやって来るワンボックスの
車内

サユリ「（赤いロメオを見つけ）あそこだわ」
主人「こんな所によく住むね」
みか「ママ着いたの？」
サユリ「そうよ。（陰ののポルシェを見て）誰か来てるみたい」
主人「サプライズだからさ。ダメならまたってことに」
サユリ「いやだなー」
車がポルシェの横に滑り込んでいく。

○元の場所

アンリの胸元に顔を近づけ、
ケント「動くな！」
アンリ「（怯えている）」
ケント「（睨む）」
沙也加「……」
ケント、胸に鼻を擦り着け臭いを嗅ぎ、
一気に服を引き散ぎる。
美しいピンク色の乳頭が突っ立ってる
乳房がポロリンと現れる。
ケント「（息が荒い）」
沙也加「ウッ！ウー——！」
タモツ「（ニヤけてる）」
アンリ「（涙が一雫、零れる）」
ソヨギ「クッ！！」
拳を握りしめる。

○山間の空き地

荷物を降ろすサユリ夫婦とみか。
サユリ「3年振りか」
主人「今日は飲むぞ」
サユリ「何言ってるの。アンリのパーティの相談じゃない。ほどほどにね」
主人「いいじゃないか……アレッ、何か匂うな？」
サユリ「木、焼いてんでしょ。私、この匂い好き」
みか「ママ、こっち？（山道を指す）」
サユリ「そうよ、気を付けて」

みか、山道をどんどん登っていく。

○元の場所

引き裂かれた衣服から露わになった

薄ピンクの乳房が艶やか——。

その持ち主アンリがビクつく。

ケントが豊かな美乳に舌を這わした。

アンリ「あ……あ……」

ソヨギ、銃を握る手に力が入る。

ケント、豊満な乳房を吸い込み、

頬張ったまま、銃をソヨギに改めて

捉え直す。

ピタッと！

ソヨギ「（動けない）」

爬虫類が胸を犯している。

○山道

サユリ「（荷物を一杯抱え）フーフー」

主人「！おい、あれ、おかしかねえか？」

サユリ「え？」

上の方で大きな炎が見え隠れしている。

みか、どんどん進んでる。

主人「まさか！」

サユリ「燃えてる？」

主人とサユリ、慌てて駆け出す。

みか、登り切り、視界から消える。

主人「みか！待てー！」

サユリも懸命。

主人「（見えた）あっ！」

× ×

炎の前で、銃を構えて、

アンリをしゃぶっている奴らが、

そして、沙也加——。

そこへ、駆けていくみか。

× ×

主人「みかー！！」

と咄嗟に駆け出す。

× ×

気付いく一同。

沙也加「！」

× ×

さらに一発が沙也加を刳り貫き、
彼女の裸体がドスンと地面に落下する。
振り解き駆け出す、アンリ。
主人、サユリ、
沙也加の元へ。

みか「おねえちゃーん」
凍てつき、泣くみか。

× ×

ケント、アンリに狙いを定め、
ドキューン！
ケントの額から、
後頭部より射抜かれた弾丸が、
飛び出してくる。

ケント「？」
振り返るケント、
ソヨギの銃がケントを捉えてる。

ケント「———」

ソヨギ「———」
ケント、黙って銃を向ける。
ソヨギ、沈黙のまま、
残った弾丸全てを顔面に打ち込む。

× ×

血まみれで横たわる沙也加。
沙也加「（微かに）ケ…ン…ト…は…」
振り返るアンリ。

× ×

ケント、ドサッ！と倒れる。

× ×

アンリ「死んだわ！」
沙也加「（笑む）ありがとう」
アンリ「ゴメンね！」

沙也加の目が、
ゆっくり閉じられていく。

みか「（叫ぶ）お姉ちゃーん！」
主人、サユリ、みかを抱きしめる。
ソヨギ、涙するアンリに歩み寄り、
抱きしめる。

○大海原を疾走するクルーザー

陰部を被うだけの最小限の
マイクロビキニで、
はち切れんばかりの肉体を
露わにさせたアンリとソヨギ。
極小水着の蛍光オレンジと
蛍光グリーンの発色が、
隠された陰部の状態を誇張さす。
沙也加の写真と遺骨を
真っ青な海に撒き、
船上の濃厚セックスで彼女を弔う。
そそり立つ肉棒。
開き滴り喘ぐ花卉。
夕陽に吸い込まれていくクルーザー。

『西暦2101年1月1日。
子供許可申請制度、廃止。
人間教育の再構築のため全世界が動き始める』

終